

幼なじみの友達が、がんで亡くなりました。

入院していると知って病院へお見舞いに行った時は、久しぶりに会ったためか、なつかしい思い出話や世間話で時間が流れました。

その後、またお見舞いに行くとその友達は、幼い時に亡くした父親の話を話し始めました。

「父親が夢に出てきた」

「父親が、いつも腰かけていた石があってそれが金色に光っている夢を見た」

「父親って、今、どこにいるんだろう」

などと。

またある日は

「なんか、実家の仏壇にお参りしたいなと思うようになった、お参りに行けるかなあ」

「父親に会いたいなあ。死んだら会えるのかなあ」

「人って死んだらどうなるん？」

とそんな友達の話に耳を傾ける時間が流れていました。

だんだん病状が悪化していき、お見舞いに行くのとはばかられるようになり、病室へ足が遠のいていた矢先亡くなったとの連絡を受けました。

お通夜の会場で、同級生から亡くなった友達から

「(病室で)父親の話や、死の話、死んだらどうなるかなんて話していたとき、妙に心が落ち着いた。気持ちが安らいでいたって言っていたよ」という話をききました。

人は必ず「死」と向き合わなければならない時があります。それは自分の「死」であったり、または大切な人、愛する人の「死」であったりします。

「死」は八苦の中でも一番苦しく、辛いものだとも言われます。「死」を意識しなければならなくなった時の恐怖や不安、辛さははかりしれないものだと思われます。

いろいろなものを失い、愛する人とも別れていかなければならない悲しみや不安、または愛する人を失う悲嘆など、それぞれ心に深い苦しみや痛みを持たれる事と思います。そんな痛みの心に寄り添い心の叫びに耳を傾けてくれる人がそばにいてくれたなら、その人の苦悩の抱え方も、少しは変わるのではないのでしょうか。

不安や苦しみ、悲しみの心に、どう寄り添っていくのか、そしてまたどう寄り添い続けていくのか、その事の大切さと、重さを考えさせられている、幼な友達の「死」でした